

Title	南宋より傳はる"天文圖"
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1943), 23(265): 230-233
Issue Date	1943-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/168625">http://hdl.handle.net/2433/168625</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 南宋より傳はる“天文圖”

The Oldest Star-Chart, of South Sung.

山 本 一 清 I. Yamamoto.

支那の上海の西にある蘇州には、有名な孔子廟があつて、この聖廟内に“天文圖”と題字した大きい石碑がある。同所には、又、地理圖もあるが、天文圖はこの地理圖と同形で、共に高さ1.85米、幅1米ばかりである。地理圖の面上に下の如き附記があるので、ほゞ其の由來を知る事が出来る。

“右四圖、兼山黃公、爲嘉邸翊善、自所進也。致遠舊得此本於蜀、司臬右浙、因摹刻以永其傳。淳祐丁未仲冬東嘉王致遠書。”

即ち、これで見ると、王致遠なる人が原本を蜀(今の四川省)から得たもので、淳祐7年(丁未)十一月に作つたものであり、皆で四枚の圖があつたらしいのであるが、今は、上記の如く、地理圖と天文圖と、二つしか残存してゐない。蘇州は清朝時代に長髮賊の亂に遇ひ、古い碑などは多く破壊された由であるが、幸ひに此の二枚は難を免れたものである。淳祐7年は學曆1247年に當り、今より696年以前のもので、現存する星圖として、此の“天文圖”は全世界に於ける最古のものである。

今般、この圖の美しい縮寫を本會に於いて發行することとなつたのは、天文學を通じて東亞の文化の由來する所を見直さうとする意志に出でたのである。之れと同時に、この圖の下半に刻されてある説明文は、當時の天文知識を綜括する名文であるから、こゝに日本文に翻譯して、讀者にすゝめることとする。讀者は此の日本文と原文(漢文)とを對照して、700年前の東洋天文學の全貌を承知せられんことを望む。

× × × ×

太極未だ判せず、天地人三才その中に函せらる。之を混沌と謂ふ。云ふは、天地人渾然として未だ分れざるを言ふ也。太極既に判し、軽く清きものは天と爲り、重く濁れるものは地と爲り、清濁混するものは人となる。軽く清きものは氣なり、重く濁れるものは形なり、形と氣と合するものは人なり。故に、凡そ氣の發して天に見るゝは、皆太極中の自然の理にして、運りて日月と爲り、分れて五星と爲り、列して二十八舍と爲り、會して斗極と爲る。皆、常理ありて、人道と相ひ應ぜざるは莫し。理を以つて知るべきなり。今、略その梗概を擧げ、之を下に列す。天體は圓にして、地體は方なり。圓なるは動き、方なるは静な

り。天は地を包み、地は天に依る。**天體**は周圍皆三百六十五度四分度の一、徑は一百二十一度四分度の三。凡そ一度は百分となす。四分度の一度は、即ち百分中の二十五分なり。四分度の三とは、即ち百分中の七十五分なり。天は左旋し、東にて地上に出で、西にて地下に入る。動いて息まず。一晝一夜に三百六十六度四分度の一を行く。(日の東行一度に縁る。故に天は左旋すること三百六十六度にして、然る後、日は復た東方より出づ。)**地體**は徑二十四度、其の厚さ之に半ばす。勢ひ東南に傾く。其の西北の高きこと一度に過ぎず。邵雍謂ふ、水と火と土と石と合して地となる。今謂ふ所の徑二十四度は、乃ち土石の體のみ。土石の外、水は天に接す。皆、地體と爲る。地の徑も亦一百二十一度四分度の三を得。兩極は南北上下極是なり。北は高くして、南は下る。地上より之を觀るに、**北極**は地上を出づること三十五度有餘。**南極**は地下に入る亦三十五度有餘。兩極の中、皆去ること九十一度三分度の一、之を**赤道**と謂ふ。横は天腹に絡なり、以て二十八宿相ひ距たるの度を紀す。大低兩極は正しく南北の中に居る。之を天心と爲す。中氣こゝに存す。其の動くや常あり、疾やからず、徐からず、晝夜は循環幹旋す。天の運るや、東よりして西し、分ちて四時となる。寒暑の平らかなる所以、陰陽の和する所以なり。此れ後天の太極なり。先天の太極は天地を無形に造り、後天の太極は天地を無形に運ぶ。三才の妙用、盡く是に在るなり。**日**は太陽の精にして、生養思徳を主どる。人君の象なり。人君に道有らば、日は五色なり。道を失はば、日は其の懸譴を露はし、人主に告げて之を儆戒す、史志に載する所の如し。日之を食するあり、日中に烏見はれ日、中黒子あり、日の色赤く、日に光無く、或は變じて孛星と爲り、夜中天に見はれ、光芒四溢するの類これなり。日體徑一度半、西よりして東し、一日行くこと一度、一歳に一周天す。行く所の道、これを**黃道**と謂ひ、赤道と相交り、半ば赤道の外に出で、半ば赤道の内に入る。冬至の日は、黃道が赤道の外に出づること二十四度にして、北極を去ること最も遠く、日は辰に出で、日は申に入る。故に時は寒く、晝は短かくして夜は長し。夏至の日は、黃道が赤道の内に入ること二十四度、北極を去ること最も近く、日は寅に出で、日は戌に入る。故に時は暑く、晝は長くして夜は短かし。春分と秋分には、黃道と赤道と相交ること兩極の中に當り、日は卯に出で、日は酉に入る。故に時は和にして、晝夜は均し。**月**は太陰の精にして、刑罰威權を主どる、大臣の象なり。大臣徳有り、能く輔相の道を盡さば、則ち月行度に當る。或は、大臣權を擅にし、貴戚宦官事を用ゐれば、則ち月は其の惡を露はして、變異こゝに生ず、史志に載する所の如し。月これを食するあり、月五星を掩ひ、五星月に入り、月光晝見はれ、或は變じて彗星となり、紫宮を陵犯し、列舍を侵掃するの類是れなり。月體徑一度半、一日行くこと十三度百分度の三十七、二十七日有餘

にして一周天す。行く所の路、これを **白道** と謂ふ。黄道と相交はり、半ば黄道の外に出で、半ば黄道の内に入る。出入すること六度を過ぎず、黄道の如く、赤道を出入すること二十四度なり。陽精は猶ほ火の如く、陰精は猶ほ水のごとし。火は光あり、水は影を會す。故に月光は日の照らす所に生じ、魄は日の照らさざる所に生ず。日に當れば光明らかに、日に就けば光盡く。日と度を同じくすれば之を朔と謂ふ。(月行して日の下に潜み、日と會する也。)邇一と遐三は之を弦と謂ふ。(天體を分ちて四分と爲す。謂ふは初八日及び二十三日なり、月行日に近きこと一分ならば之を邇一と謂ひ、日を遠ざかること三分ならば之を遐三と謂ふ。日に邇きこと一分ならば日光の半ばを受く、故に半ば明らか、半ば魄にして、弓が弦を張る如し。上弦は昏に見ゆ。故に光は西に在り、下弦は旦に見ゆ、故に光は東にあり。)天中を衡分すれば之を望と謂ふ。(謂ふは十五日の昏。日は西に入り、月は東に出で、東西相望み、光満ちて、魄死する也。)光盡き體伏す、之を晦と謂ふ。(謂ふは三十日にして、月行日に近く、光體皆見えざる也。)月白道を行き、黄道と正交する所に、朔在れば日食し、望在れば月食す。日食は月體が日光を掩ふなり。月食は月が暗虚に入り、日光を受けざるなり。(暗虚とは日正しく照に對する處なり。) **經星** は、三垣、二十八舍、中・外官星これ也。計二百八十三官、一千五百六十五星にして、其の星動かす。三垣は紫微・太微・天市垣なり。二十八舍は、東方に七宿、角・亢・氐・房・心・尾・箕にして、蒼龍の體を爲す。北方に七宿、斗・牛・女・虚・危・室・壁にして、靈龜の體を爲す。西方に七宿、奎・婁・胃・昂・畢・觜・參にして、白虎の體を爲す。南方に七宿、井・鬼・柳・星・張・翼・轸にして、朱雀の體を爲す。中・外官星は、朝に在りて官を象どるは、三臺・諸侯・九卿・騎官・羽林の類の如き是れなり。野に在りて物に象どるは、鷄・狗・狼・魚・龜・鼈の類の如き是れなり。人にありて事に象どるは、離宮・閣道・華蓋・五車の類の如き是れなり。其餘は義に因り名を制す。其の名を觀れば、其の義を知るべし。經星は皆常位を守り、天に隨ひて運轉すること、譬へば百官萬民、各々其の職業を守りて、命を七政に聽くが如し。七政の行くや、其の居る所の次、或は進退常ならず、變異序を失する有るに至らば、則ち災祥の應すること影響の如く然り、占ひて知るべきなり。 **緯星** は五行の精にして、木を歲星と曰ひ、土を填星と曰ひ、火を熒惑と曰ひ、金を太白と曰ひ、水を辰星と曰ひ、日月を併せて、之を七政と謂ふ。皆天に麗し。天の行くや速やかにして、七政の行くや遅し。遅は速の帶ぶる所と爲る。故に天と共に東に出で西に入るなり。五星は日月を輔佐し、五氣を斡旋すること、大官職を分ちて治め、天下に號令するが如し。利害安危斯れに由つて出づ。至治の世、人事常有らば、則ち各々其の常度を守りて行く。其れ或ひは君が臣職を侵し、臣が君權を専らにし、政令錯繆し、風教陵遲し、乖氣感ずる所あらば、則ち變化多端

にして、復常理に非ざるなり、史志に載する所の如く、熒惑匏瓜に入り、一夕見えず、匏瓜は黃道の北三十餘度に在り、或は己を勾て行く、光芒震曜五斗の如し。太白忽かに狼星を犯す。狼星は黃道の南四十餘度にあり、或は晝見え、天を經り、日と明を爭ふ。甚だしきは變じて妖星となる。歲星の精は變じて攬槍と爲り、熒惑の精は變じて蚩尤の旗と爲り、填星の精は變じて天賊と爲り、太白の精は變じて天狗となり、辰星の精は變じて枉矢と爲るの類、日の精が變じて索と爲り、月の精が變じて彗に爲るが如し。政教ここに失し、變異かしこに見はる。故に政を爲す者は尤も候を謹むなり。〔天漢〕は四瀆の精なり。鶉火に起り、西方の宿を經て、北方に過ぎ、箕尾に至つて、地下に入る。二十四氣は本と一氣なり。一歲を以つて之を言へば、則ち一氣のみ。四時を以つて之を言へば、則ち一氣分れて四氣と爲る。十二月を以つて之を言へば、則ち一氣分れて六氣と爲る。故に六陰六陽は十二氣と爲る。又、六陰六陽の中に於いて每一氣分れて初終と爲らば、則ち又裂けて二十四氣と爲る。二十四氣の中は、每一氣に三應あり、故に又分ちて三候と爲す。是を七十二候と爲す。其の本を原すに、始めは實に一氣のみ、一より四と爲り。四より十二となり、十二より二十四となり、二十四より七十二となる。皆一氣の節なり。〔十二辰〕は乃ち十二月に斗綱の指す所の地なり。斗綱指す所の辰、即ち一月の元氣在る所は、正月寅を指し、二月卯を指し、三月辰を指し、四月巳を指し、五月午を指し、六月未を指し、七月申を指し、八月酉を指し、九月戌を指し、十月亥を指し、十一月子を指し、十二月丑を指す。之を月建と謂ふ。天の元氣は形の見る可きもの無し。斗綱建つ所の辰を觀れば即ち知る可し。斗は七星あり、第一星を魁と曰ひ、第五星を衡と曰ひ、第七星を杓と曰ふ。此の三星、之を斗綱と謂ふ。假へば建寅の月の如き、昏ならば則ち杓は寅を指し、夜半には衡が寅を指し、平旦には魁が寅を指す。他の月も此れに倣ふ。〔十二次〕は乃ち日月所會の處なり、凡そ日月は一歲に十二會す。故に十二次あり。建子の月次の名は元枵、建丑の月次の名は星紀、建寅の月次の名は析木、建卯の月次の名は大火、建辰の月次の名は壽星、建巳の月次の名は鶉尾、建午の月次の名は鶉火、建未の月次の名は鶉首、建申の月次の名は實沈、建酉の月次の名は大梁、建戌の月次の名は降婁、建亥の月次の名は陬訾。〔十二分野〕は即ち辰次臨む所の地なり。天に在つては十二次・十二辰となり、地に在つては十二國・十二州となる。凡そ日月の交食、星辰の變異は、臨む所の分野を以つて之を占ふ。或は吉、或は凶、各々に當る者あるなり。